

て、其間僅に三寸より三寸五分を過す、その性柔軟にして折難きによりて、領主堀丹波守の藩にては、皆此竹を以て打毬杖を作れり。

〔新撰字鏡〕築竹 方標反、平、竹也、細竹也、

〔倭名類聚抄〕築竹 簇也、志乃、又保曾太介、

〔蒋鈞切韻云〕築先鳥反、和名之乃、一云佐佐、細細竹也、

〔撮壤集〕築竹 長間竹竹作筈

〔書言字考節用集〕築生植 長間竹同 百葉竹 篠同 細竹葉

〔東雅樹竹〕竹タケ○中 倭名抄に略○中 蒋鈞切韻を引て、築は細々小竹也、シノ一にサ、といふ、俗用「小竹字」と見えしは、即今サ、といふもの、其種類大あり、シノといふは、シとはサといふ語の轉せしにて即細也、ノとは即箆也、サ、とは即細也、抄に俗用と云ひしてシノといふと見えたる、和名シノといふ、轉語せしに

〔倭訓栢志前編十一〕亥の 日本紀に築又小竹、新撰字鏡に築をよめり、亥なふの義成べし、又小蔑の義也といふ。○中

亥の、め 萬葉集に細竹目と書り、めはむれ反築の群竹の義也といへり、

〔和漢三才圖會〕築芭木 長節間竹俗云奈與太介、兩節間稱興、略言也、 女子竹桑軟狀似婦

按築小竹也、之乃築同、俗云之乃布竹高六七尺周二寸許、其葉深青色、節不隆、其籜白色脆而難脫、節間長、其筍味甚苦硬不可食、其竹節際有白粉、如濕熱甚浸則愈多變黃色、入取充天竹黃可辨也、其竹民家用爲天井及壁骨管笠骨、本草蘇頌曰、肉薄間有粉者此竹矣、

〔古今要覽稿〕草木 亥の

亥ぬ一名亥の、一名ほそたけは、漢名を築といふ、これは延喜式にいはゆる小川竹のや、小なるものにて、今所在極めて多し、その幹深青色にして、高さ七八尺、その枝は五枝なるもあれば、三枝